
仮面ライダー DECAEDvsBESTvsAll Riders ～イノチノメグルタビ～

時流 明日無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー
vs All Riders
DECADE vs BEST
（イノチノメグルタビ）

【Nコード】

N0439BA

【作者名】

時流 明日無

【あらすじ】

2010年：スーパーショッカーは壊滅、世界は平穏に戻ろうとしていたその時、全ての世界で何かが狂い始めていた… 全世界最大の危機が訪れる時、最強の破壊者となる者、そして往年の仮面ライダー達と新しき仮面ライダー達、全てのライダー達が立ち上がる！仮面ライダー×仮面ライダーディケイドvsBEST vs All Riders！彼らの奇跡の伝説は、止まらない…

始まりの始まり

「さて…と…」

そうつぶやきソファから立つ長身の青年が近くにいた女性――といっても青年と同じ年くらいの年齢であろう――に話しかけていた。

「この世界でやることも済んだし…そろそろ次の世界に行くか？」

「そうですね、ではスクロールを…」

そう言うとその女は撮影の時に使うようないたって普遍的な形をしたスクロールを変える。すると何故か先ほどまで夜であったのに周囲はすっかり日の光に満ち溢れていた。

先程このスクロールは普遍的な形と言ったがその壁紙は撮影で使うような代物では無い…いや、もちろん撮影で使っても良いのだが…

また通常のスクロールには無い“機能”が備わっている…

様々な世界…つまりパラレルワールドを自由に…ではないが移動できること…だ。

彼らは“様々な世界を旅する者”の一人であるフリーカメラマン“門矢士”とこの写真館の主人の孫“光夏海”。奥にはこの写真館の主“光栄次郎”がいつもの笑顔でコーヒーを入れているのであろう匂いが漂ってきた。

――

…さて、読者の皆様は既にお気づきだろう…彼らの仲間の一人が現

在までいないことに：

その仲間、“小野寺ユウスケ”は一年ほど前たまたま着いた“彼の世界”に戻ることにあった。未確認生命体が暴れていたため彼の力が必要となったのだ。

「ふう…」

最後の戦いを終え一息つくユウスケ。このため息とともにこの世界は永遠に生命の営みが平和であることが約束された：ただし、その代償は多くの命と彼の“死”を奪うこととなったが：

空にはあの凄まじい戦いなどなかったかのように青空が広がる。

「姐さん…俺…やったよ…」

ポツリと今は亡き“愛する人”に報告する。頬にはほんの一粒だけ雫が伝った。

死を失うことがどれほどの恐怖か：しかしそんなことはどうってこと無いと思っているのかユウスケは一年ほど前別れた戦友達を思い返していた。

「士…夏海ちゃん…栄次郎さん………海東」

――

「さてと…そろそろ士達も着いた頃…かな？」

そう呟きながら道に立ってバイクに体を掛けている男…自称トレジャーハンターの“海東大樹”だ。彼は士達の仲間…というより利害一致関係とのみ付き合い、利害が異なればすぐさま掌を返す…と言う感じだろうか？とにかく海東とはそんな男だ。

「だけど…何故このままなのだろうか…」

そういいながら愛車、マシンディエンダーに跨る。
え？TVで出なかったって？

それも当たり前だ、海東がこれを盗んだのは今から9ヶ月前、海東がたまたま立ち寄った世界で見つけ一目惚れしたものだ。皆様がご覧になっていたらそれはそれで奇跡のようなものである。

：第一、仮面“ライダー”にバイクが無いのは致命傷では無いだろうか？

「…さてと…お宝はどこかな？」

ディエンダーのエンジンを起こした。

――

「ここはなんの世界なんでしょう？」

「さあなあ…」

『それより…』

そう言うのは白いコウモリ…キバウラだ。

『なんであんたの服、変わらないの？』

「…え？」

「…そういえば…」

――服が変わらない。

常人には理解し難い理由で悩み始めた二人と一匹。

しかしそこは士が「まあ、どうってことは無い」と考えたのか考えて無いのか分からない答えを出した。

「とりあえず外に出ないことには何も始まらねえだろ」

「そうですね」

これが彼らの スタイル いつも通りだ。悩んだって仕方ない、それよりも

歩み出す。二人は玄関を開けた。

――

「…!!」

そこで彼らが目にしたのは、何故か止まった街並み…それと分かるのも理由があった。

「…破壊されている途中、止まった…かのような感じだな」

そう、異種異形のモノが暴れてビルや人やら車やら何もかもを破壊しようとしているところで何故か止まった…としか考えられない風景だ。

そして…その街並みは彼らも忘れられない街並みだった。

「…私の世界…」

「…ああ…帰ってきた…ってわけか」

帰っては来た…それも行きと同じ姿のままこの世界は止まっていた。

「つまり…俺たちの旅は…意味が無かったのか…?」

それを言うと同時に士は「いや、大シヨッカー達は倒した、意味は…」と訂正したが…不可抗力で崩れる夏海を見て舌打ちをした。

…そのため彼らは背後から迫る灰色のオーロラに気づけなかった。

「う！うわぁっ!？」

「キャッ、キャアアア!！」

気付いた時もはや時すでに遅し。彼らは飲み込まれていた。

――

「うぐ…」

ようやく士の目が開いた。

今は…何時だ？そんな事を思いながら体をゆっくり起こす。

そして、彼の太もをまくらにしている夏海を発見するのはそう時間がかからなかった。

「…オイ、夏ミカン…起きろ」

「……ん…んー…つかさ…くん？」

「ああ、気づいたならのいてくれ、立てない」

「…!!…すっすみません!！」

そういうが早く少し頬を紅潮させながら夏海は立った。

「さてと…」と言いながら士は周りを見渡す。

ここは…

「あいつと…また会う事になるとはな…」

「ご名答：流石は門矢士さんですね」

振り返るとやはり金髪である程度背の高い“彼”が立っていた：その背後には彼の仲間と思われる奴らの姿も確認された：暗くて分かったが：

「：また、俺になんかようか？：生憎だが忙しい、お前らで解決を：」

「：私たちだけでは：ムリなのです」

「お恥ずかしいながら」と言いながら彼は二の句を告げた。

「まずは全員そろうのを待ちましょう」

「全員？まだ仲間がいるのか？」

「違うよ、士。僕の事だろうよ」

声が聞こえた方をみる、瞬間：士の額には銃口が当たっていた。

「バン：士、用心深くなりなよ？」

クスと笑ながら暗闇から現れたのは海東大樹であった。

「：まったく：」

「さて、始めてくれないかな？」

「まだです：そろそろ：」

そういうと空から誰かが降って来た。

「うわああああああああ！！」

「うわ！？あぶねえ！！」

「フゲフゴッ！？」

「ユウスケ！！」

ユウスケが落ちてきて士が避けユウスケが地面にクリンヒット。それを見た夏海が再会の喜びかそれとも驚きか：とにかく叫んだ。

：頭上からなにか落ちて来たら：避けるのは当たり前だ。士はそう呟きながら降ってきたユウスケを引っ張りあげた：この床はそれ

ほど硬く無いのかアークルの仕業なのか…ユウスケは無傷だった。
「では…そろそろ始めましょうか？」

――

「…先ほどもご覧いただいたい…」

「待て」

士が叫ぶ。

「前から思っていたが…事情を言う前に名を名乗るのが常識だろう？」

あえて大きな声で尋ねた。

「…」

「…言えない事情でもあるのか？」

「いえ、別に。いいでしょう、僕は紅渡…貴方が会われたキバとは別の世界のキバです」

「…つまりオリジナルの…」

「…パラレルワールドに元の世界も再構成世界オリジナル
リ：イマジネーションもありません。全てがオリジナルなのです」

「そう…か…」

士は言及を避ける事にした。そして“彼”の名前から彼の仲間の構成を知った…が一応「後ろの奴らは？」と尋ねた。

渡は瞬時に士が自分の後ろに控えている自身の仲間が誰か知った事を悟った。しかしそれより早く一番左にいた…イマドキとは決して言えない金髪の青年から挨拶を始めた。

「俺は城戸真司。よろしく！」

「…乾巧」

「もー巧くんったら、愛想笑いの一つでもしなよ！…あ、俺は津上翔一！士くんも笑いなよ！」

「あ…あのう…流石にちょっと…その…テンションで接するのは…

あ、ぼぼ僕は野上良太郎…です」

「俺は天の道を往き、全てを司る男…天道総司」

「よっ、青年！俺は日高仁志…ヒビキだ、宜しくな！シュッ」

「俺は二千の技を持つ男、五代雄介！」

「ああ…宜しく」

そして士は最後の一人に目を向ける。

士は最後の男を簡単に知っているだけでなく見覚えがあった。

「…剣崎…」

「…ああ、そうだ。剣崎一真だ。…オイ、渡？話が違うぞ？こんな破壊者生かしておく必要はない」

「何を言うんですか！？彼らの力が無ければあいつらと対等に戦う事なんて…」

「出来る。なんなら俺一人でもいい…とにかく、この破壊者共の手を借りるのであるなら…俺は俺の仲間だけであいつらと戦う」

「どうやって！？貴方の世界にはもう奴らは来始めてるはずじゃ無いですか！？」

「ああ、そうだ！その通りだ！！そうだが…これは俺たちの問題だ、俺たちは敵がきたらムツツブス…それだけだ！」

「仲間割れ…か」と呟きながら士はただ聞いていた。

「とにかく、俺は…俺達はもうお前達とは付き合えウェイ…じゃあな」

「ちょっちょっと！？」

「…無駄です」

そういいながら剣崎は振り返り一つの地球セカイに入ってしまった。良太郎は追いかけようとしたが渡が制止した。

「お見苦しいところを…」

「いや…なるほど、一枚岩じゃ無いのか」

「はい、何せ全員違う世界で戦っていて…」

「それに…」

五代は言い始めた。

「彼は…剣崎一真は…戦いで人間じゃなくなった…精神的にも参っているんだと思う」

「かく言う俺も、死ぬ事が出来ないのだがな」と五代は笑った。話を聞けば津上は超能力者、乾はオルフェノク、紅は半分ヴァンパイア…とそれぞれに事情があるそうだ。

「俺も…」

そういいながら前に出て来たのは乾巧。またの名をウルフルフェノクと言う…聞こえのいい様に言えば人類の進化した者だ。そんな彼がむつすりとした表情のまま言う。

「俺も意見自体は剣崎と一緒に…ディケイドは破壊しかできない。そんな奴に世界の秩序は任せられない」

「じゃあなんで剣崎と一緒にでていけないんだ？」

士は言葉に冷たさを含めて言った。どうせまだ俺の世界に被害は無いからとか言うのであろう、そう思った…が

「チャンスを与えてやろうと思ってな…渡達が信じろ信じろと煩くて…仕方無しだ。なあ？天道」

「全くだ…まあディケイドの破壊の力を借りなくては完全に駆逐出来ないと言う俺達がまだまだ未熟であると言う事でもあるが」

そう天道が冷たく言った。が、士は気に入ったとでも思っているのか得意気な笑みを浮かべた。

「ところで…奴らとは？」

海東が早く話したまえと言わんばかりに尋ねる。

「はい…実は大変な事になってしまったのです」

紅渡はそう強く、そして丁寧に告げた

依頼（前書き）

これまでの、仮面ライダーディケイドは…

士「…そろそろ次の世界に行くか？」

ユウスケ「士…夏海ちゃん…栄次郎さん………海東」

海東「…さてと…お宝はどこかな？」

夏海「…私の世界…」

士「…ああ…帰ってきた…ってわけか」

紅「僕は紅渡…貴方が会われたキバとは別の世界のキバです」

剣崎「とにかく、俺は…俺達はお前達とは付き合えウエイ…じやあな」

全てを破壊し、総てを繋げ…

依頼

「はい：実は大変な事になってしまったのです」

「大変な事：？」

士は首を傾げる。スーパーショッカー滅亡以来大きな組織が動いている様子どころかうワサ、海東の情報でさえ聞いた事が無かったからだ。

「：どう言う事なんだい？」

海東が問う：それを聞く限り海東も初耳のようだ。

「それについては俺達が説明しよう」

「：と言っても僕達も情報がほとんど無いのですが：」

そう言って前に出たのは城戸真司と津上翔一。そして城戸が口を開いた。

「まずスーパーショッカーなんだが：結論から言うと、完全には滅んで無かった」

「「：！！」」

士、ユウスケ、海東、夏海がたじろぐ。それはそうだ、スーパーショッカーは滅んだはずなのだ。しかしまだ残党がいたとは：

「なっなんてしぶとい精神力：」

「：しかしもはや残党狩りはカンタンに出来るだろ？」

「はい、僕たちもそう思っていました。：しかしあなた方とはコンタクトが何故かとれない、残党狩りに向かえるライダーもいない：そうしているうちに再び何処からともなく勢力が集まったようです」

「：まさか：」

「そんなことが：」

ユウスケ、夏海が無気力に脱力する。

「で、連中はどんなのなんだい？」

やはりサッサと終わらせたいのか海東が言う。しかし…

「そっそれは…」

「先ほども言いましたが…我々も分からないのです…」
海東は盛大なため息をもらす。

「なんだい…それなら僕は下り…」

その時

「…私なら少しは知っている…」

士達は後ろをみる。すると…

「ディケイド…」

鳴滝がいた。

「なっ鳴滝!!」

士がとっさにベルトを構える。

「まっ待て、ディケイド!今回は依頼に来たんだ!!」

「依頼…?」

「そう、この者たちと全く同じく依頼だろう…」

「同じ…依頼…鳴滝さんも?」

そう言うのは紅渡。鳴滝は続ける。

「ああ…そうだ」

「…で、情報は無いのか?」

士が問う。

「……受けてくれるのか…?」

「渡達と同じ依頼だろ？ 渡達のを受けるのにお前の受けないのはおかしい…違うか…？」

「……………すまない……………そして、変わったな…大首領」

「…え…？」

鳴滝は呟くように言った…そして本題へと入った。

「とりあえず依頼は同じくその組織を倒してくれ…ヘタをすると更に多くの命が…」

「ああ、分かった、分かったから早くお前の持つ情報をくれ」

「…奴らは名を【ネオスーパーショッカー】と言う…」

…ここまできるともう名前のネタすら尽きてくるのか…土はそう思いながら聞いていた。

「スーパーショッカーの残党はある組織と合体して新たな組織を作った。そして大ショッカー時代で既に滅ぼした世界で再起の準備をしている…すでに二つの世界がやられた」

「…奴らの目的は？」

「詳しくは…やはり分からない…」

「そしてこれは僕たちの情報なのですが…今は僕達が知る限り二つの世界が襲撃を受けています」

「その一つが剣崎一真のところ…と言うわけか…」

「はい、そして…もう一つは…ここ」

渡は指でさし示す。

「今からこの世界に行ってもらいます」

指をさされたその地球セカイも他のと同じ様に青く輝いていた。

「…平和そうに見えるけどな…」

「外見で判断するのは良く無いぜ、ユウスケ」
ユウスケの独り言を土が諷める。

するとおもむろに天道と日高がこちらにやってきた。

「…あと…このカードを渡しておく…今はブランクだがいつも通りすれば使えるようになるだろう」

そういいながら天道総司がカードの束を渡してくる…しかし数が多

い…

「なんなんだ…この枚数は!？」

「青年! 青年にはこれだ」

そういつてヒビキが海東にカードを渡す。同じくブランクのようだ…

「…全世界の未来を貴方に託します…」

「あ、あ、でっでも! ぼっ僕達も…できる限りの事をします…」

「ディケイド…私の依頼とは理不尽だろうが…頼んだ」

士を先頭に海東、夏海、ユウスケが並ぶ…そして士はフツ…と息を漏らした…

「俺は世界の破壊者であり、通りすがりの仮面ライダーだ!! 覚えておけ!!」

宣言が高らかに響く。

「…ハイ…世界を…総ての世界を貴方に託します」

渡が静かに告げる…

すると光が四人を包み込み気がつくくと士達は写真館の入り口に立っていた。

…海東はすでにいなかったが…

不意にユウスケが扉に手を当てる…

「久しぶり…だな…ここ…懐かしい…」

少し頭を下げ小さく呟く。ゆっくりユウスケは瞼を閉じる…すると頭の中で今までの旅の映像が鮮明に流れていく…

ユウスケは記憶力に自信がある方では無い、だからここまで鮮明に流れるとは思わず少し驚いていた…そして、ここが自分にとってどれだけ貴重な存在なのかを噛み締めていた。すると…

「ははっ…だろうな…おかえり」

「…おかえりなさい、ユウスケ」

士、夏海が変わらない声で“帰宅”迎えてくれた。ユウスケは涙を堪えながら2人の方を向き目を開けて2人を見る。とても優しい笑顔だった。

「ただいま…ありがとう、士、夏海ちゃん」

そういいながらユウスケが扉を開ける。

最初はカフェだと思って開けたこの扉…

「変わらないな…」

あの時と全く変わらない写真館がそこにはあった。

ユウスケはこれまでの激しい戦いとこれからの不安、戦い、出会いをしばし忘れて更なる哀愁に浸った。

いつもならちよっかいを出す士も珍しく空気を読んで静かに奥に入って行った。それに夏海、遅れてユウスケが奥に入って行く…すると士からこんな声が聞こえてくる。

「…なんだこのスクロールは…」

それは一つのエスニック調の王座の周りに無数の銀の円盤が積み重ねてあったり散らばっていたり…とにかく散乱している絵だった…

Next…BESTside…

光有れば影あり

「…さあ、覚悟はいいな？」

〈BEST Final Attack Card Charge!〉

そう言い放つ黒い異形の者〈3〉彼の周りには黒いエネルギーが集まり〈2〉やがて右足一点に集まる〈1〉

「BESTキック！」

〈Go!!〉

ベルトについているバックルを押し倒す。するとバックルは大音量で鳴り響く…と、彼の背中と対峙する異形の者——サイラが彼に向かって走ってくる。サイラは右手を大きく振りかぶり殴りかかる、瞬間…彼の右足がサイラの頭を回し蹴りで蹴り飛ばした。

爆散するサイラ。彼はベルトの横にあるカードケースの外側を軽く叩く。すると無印のものや色が付いているもの関わらず沢山のカードが中から飛び出てきてそのうちの一枚の無印のカードがサイラのいたところから“記憶”を取り込み封印する…

「…終わり…っ」と

そう呟くと徐にバックルを腰から離し変身を解除する…そして近くに止めた彼のバイク——BESTRUNに跨り渚沙市中央の浜音山に向かって走らせた。

彼は“高見^{たかみ}大智^{だいち}”。“カオス”とその傘下の“サイラ”と言う“

地球^{テラ}の欠片^{かけら}”。“記憶”と言うものから構成されている怪物に對し同じく“記憶”から構成されている“レジェンド”のチカラを使い“仮面ライダーBEST”となって戦っている。

彼は山の中腹にある展望台の前の山肌から少し出っ張って出ているボックスにカードを差し込みロックを解除する…と言うのも以前ま

での暗証番号制の機能が故障してしまいそろそろ不便に感じていた事もあってカードリーダー形式にしたのだ。

そうこうする間に山肌が裂け中に通じる道が現れる：と、大智はバイクごと中に入って行く。バイクの後輪が完全に入ったところで山肌は元の通りに閉まった。

バイクを途中の部屋に置いてそのまま研究所内のホールに入る。

「あ！おかえり！」

「その顔は：勝ったみたいだな！」

そう言うのは“佐原 麻衣”と“一之瀬 海斗”。

「ああ、今回は楽だったぜ」

「ふふ、とにかくコーヒー入れますね」

「あ、G5のメンテ終わりました」

「G-01ショットの整備はもう少しかかるが：」

そう言うのは“エリカ”、“ツバサ”、“ダイキ”の三体。

三体と表記したのは実は彼らは人間では無いからだ。彼らは高見大智の父、“高見誠司”に開発された次世代型多機能ロボット、01-02-03-Systemだ。

「G-01か：海斗、一応繊細な機械なんだから丁寧扱ってくれよ？」

「ちよっ、俺のせいだよ！？まずあの状況で繊細とか丁寧とか言われてられるか！！」

「そうか？」

「大智：海斗には難しいんじゃない？」

「なるほど」

「おおおおい！！なんで麻依まで混じるの！？イジメ！？」

と、天然なのか故意なのか分からない大智と確実に弄りに来た麻依のタッグに叫ぶ海斗。そこにピンクのエプロン姿のダイキがお盆の上になにかをおいて持ってきた。

「じゃ、祝いもかねて軽くティータイムにしよう。抹茶のシフォンケーキを作ってみたんだ」

「「「いっやったぁーーーーー!!」」」

TAKAMILABは今日も賑やかだった。

海の都、渚沙…今日も波は穏やかに、陽は微笑みながら時は流れて行く…

「…光あるところ、影あり。光が強きほど影も暗し…クククククク…」

Next…DECADEside…

メダルと出会いと行方不明（前書き）

これまでの仮面ライダーディケイドは…

士「…そろそろ次の世界に行くか？」

紅「僕は紅渡…貴方が会われたキバとは別の世界のキバです」

城戸「スーパージョッカー…完全には滅んで無かった」

鳴滝「…すまない…そして、変わったな…大首領」

ユウスケ「久しぶり…だな…ここ…懐かしい…」

士「…なんだこのスクロールは…」

全てを破壊し、総てを繋げ…

メダルと出会いと行方不明

「…なんだこのスクロールは…」

一つのエスニック調の王座の周りに無数の銀の円盤が積み重ねてあったり散らばっていたり…とにかく散乱している絵…今まで様々な世界で色々な絵を見てきた士達だがその異様さは一目瞭然だった。

「これは…コインか何かか？」

ユウスケが近寄って確認する。

夏海も不思議そうに見る、が、大シヨッカーの元大首領たる士はそれが何なのか、思い当たる節があった。

「何なんでしょう…？」

「…なるほど…それは…オーメダル。それもセルメダルと言うものに分類されるものだ」

「「オーメダル？」」

聞き覚えのない単語にユウスケと夏海が反応するのは当然の結果と言えよう。士はそのことを話し始めようとした…が

「ああ…この…」

「あ、ユウスケくん！久しぶり！元気だったかい？ちょっと待ってね、今コーヒー入れるから」

栄次郎さんの親切の前に打ち切らざるを得なかった。ユウスケも「お久しぶりです！ありがとうございます！」といってしまう継続不可と判断した士が立ち話もなんだと意見を出し座ってコーヒーを待つことにした。

――

写真館の中ではコーヒーの匂いが充満していた。ユウスケはその匂いを臭ってまた一年前を思い出していた。

「はい、ユウスケくん、士くん、夏海」

栄次郎が慣れた手つきでコーヒーを各々の前に置いていく。

「ユウスケくん久しぶりだねえ…元気だったかい？」

「あ、ハイ！元気でしたよ！」

「良かったよ…まあ、また2人と仲良くしてやってね」

「もちろんです！」

長話になるかと思ってコーヒーに口を付けた士だったが案外早く終わり、さっきの話の続きをし始めた。

「で、なんなんだ？士。あの…オ、オ、オ」

「オーメダル」

「ああ、それぞれ！それって…一体なんなんだ？仮面ライダーと関係があるのか？」

「大いに関係ある…最もこのセルメダルと言うヤツは仮面ライダーとはあまり関係ないのだが…」

そういつて絵に書いてある銀色のメダルを指差す士。「じゃっじゃあ」とユウスケは続ける。

「そのセ、ル、メ、ダ、ル？とか言うヤツはなんなんだ？」

「欲望を物質化したようなもんだ」

「欲望？」

「お前だってあるだろ、八代に会いたいとか？八代に抱きつきたいとか？八代に…」

「ちよっ！？なんで姐さんばっか！？」

口元に笑みをもちながらどんどん八代八代八代と挙げていく士。ユウスケは大慌てで止めに入りようやく24回目の『八代』で止まった。その決め手は…夏海の笑いのツボであったことは言うまでもない。

「あはっ！あはははははっ！！」

「たく…士くん！ユウスケを苛めないでください！」

「おっ俺は！はははは！例としてははは！言っただけッ：ははは！」
しかしこれでは話の続行は不可能：それに収まった士も「とにかく外に出てみるか」と言ったので仕方なく玄関を出る三人。すると、それまでコートを着ていた士の服装がどこかの学者の様な格好になった：と言っても理系でないことは白衣じゃないことから分かった。
「ふむ：これは：なんだ？」
「ってか何持ってるんだ？士」
「ん？えーっと：本：みたいだな」
「かなりざっくりだな、本って！？」
そうユウスケが叫んでいる間に夏海はその本を取り上げパラリと読む。

「ん：中世の日本について書かれたものですね：」

「中世と言えば：織田信長？」

「は？何言ってるんだ源頼朝じゃないか？」

「いやいや、足利尊氏ですよ！！」

「それは無い！」

夏海の意見を士とユウスケが否定する。

「とりあえずこの世界での士くんの役目は：」

「歴史学者：だな」

「またビミョーなところに：」

ユウスケは嘆くがそんなことをする程暇じゃないので：とりあえずバイクで見て回ることにした。当てのない以上こうするより仕方ない。二つのバイクが並走する形で走っていった。

――

「収獲無し、か：」

士達はソファに持たれかかる。三時間くらいバイクで走らせたのがどこからどうみても平穏な：ショックどころかこの世界にいるはずの怪人や仮面ライダーまでいなかった。渡達は嘘を付いたのか

…？土はそんなことさえ思い始めた。

「まあまあ、そんなにそんなにしょっちゅう戦ってたらすぐに世界終わっちゃうって！」

「まあな…」

ユウスケは尚も明るく振舞っているが土の態度に変化は見られない。

――と、その時、

「すみませーん」

玄関から声がした。栄次郎は条件反射的に「はい」と言って玄関に行く。

「このカフェ潰れたんですか？」「まあ、コーヒーくらいは出せるよ」などとやり取りが聞こえる辺りカフェと間違えて来た客だろう。そう思いながら土達は暫し静かに待つ。と、栄次郎は客を連れ中に入って来た。

「あ、こんにちわ」

そう言いながら入って来たのは20前後の女性だった。

「コーヒー待っててね、すぐ作るから」

「あ、はい」

そう言って近くのイスに座る彼女…と、何故か彼女は土達をじっと見ていた。すると何を思ったか徐に立ち上がり土の前に立つ。

「……………なんだ？」

「え！いや、あのお爺さんに『何か相談するなら背が高いのに言っ
てごらん』と言われたので…」

彼女が言う話によるとここは元々カフェがあって、彼女はそのマ
スターに愚痴とか悩みとか相談をしていたそうだ。その旨聞いた栄
次郎がそれならと土に相談することを提案したそうだ。

面倒なことを…と土は内心舌打ちした。しかし彼女の前でそんなこ
と出来る訳もなく「それで、なんだ？」と適当に返した。

「実は…」

「ちょっとまって、まずは名前からって教わらなかったのか？…あと座れ」

「え！あ、はい…私は小坂^{こさか} ヒナと言います。大学生です」

「俺は門矢 士だ」

「あ、俺は小野寺 ユウスケ！よろしくね！」

「私は光 夏海です」

ヒナは「よろしくお願いします」と簡単に応えて話し始めた。

「実は、三ヶ月前から彼氏が行方不明になってしまったんです…」

…いきなり普通なら有り得無い話に戸惑うユウスケと夏海。士だけは応えていないのかそれとも興味が無いのか平然としていた。

「そんなもんは警察に届け出るんだな」

「警察にもちゃんと届け出ました！…だけど…彼…高野^{たかの} エイジはちょうど一ヶ月前の今日、村上美術館^{むらかみ}のアルバイトに行ったきり帰ってこないんです！！」

「その村上美術館ってのが怪しいんじゃない？ね？夏海ちゃん」

「ですよね！」

強い口調で言うヒナ。それに合わせて徐々にテンションが上がっているユウスケと夏海。しかし尚も士は平然と…寧ろ顔を顰めながら尋ねる。

「…それで、俺に何をしろと？」

「お願いです！一緒にエイジを探して下さい！」

ヒナは深く頭を下げる。前においてある机に額が当たるかと言うぐらいまで頭を下げた。が、

「断る」

「え…」

考える素振りも見せずすぐに士は答えた。ユウスケなんかは「おい、士！何言ってるんだよ！！」と怒りを露わにしている。しかし士は首を横に振る。

「俺達だって暇じゃ無い。そんな事していたら俺達がすべき事を見失う。悪いがムリだな」

冷酷に言い放つ。ユウスケは尚も士に異議を唱える。が、ヒナはシヨックを受けながらも「もういいです：ユウスケさん」と細く言う。

「：返事、分かってました：多分断られるだろうと：ですから、もういいです：すみませんでした」

そう言うのと席を立ち、帰ろうとした。その時、

「ま、どうせ俺達行くアテも無いんだから村上美術館ってところでも行ってみるか」

「「え…？」」「」

士の一言に三人が声を合わせて驚く。しかし士は気にせずユウスケに尋ねる。

「ところでユウスケ、村上美術館の場所分かるか？」

「え！あ、うーん、分からないなあ…」

「ナツミカンは？」

「夏海です！！…私もわかりません…」

「あー、それは困ったもんだ。誰かここら辺の地理に明るい人居ないもんか？」

士は残念そうに顔を顰め少し声量を上げてそういった。

「…」

「ああ、そうだ。ヒナ、一緒に村上美術館ってとこに着いて来てくれないか？」

「…もしかして…」

「その村上美術館に行ったついでにそこの館長に色々聞いてみるだけだ」

そう言うのと口元に笑みを持たせながら士がヒナを見る。ヒナは「ありがとうございます！」と連呼しながら「別についてだから感謝しなくていい」と言い嫌がる士の手を握った。

「…士って、ホント素直じゃ無いよな…」

「そうですね。でも、そこが士くんの悪い所でもあり、いい所です」

「…だね」

ユウスケと夏海は笑顔で二人を見ていた。

5、ボウルと窃盗と美術館（前書き）

これまでの仮面ライダーディケイドは…

紅「僕は紅渡…貴方が会われたキバとは別の世界のキバです」

城戸「スーパーショッカー…完全には滅んで無かった」

士「…なんだこのスクロールは…」

ユウスケ「これは…コインか何かか？」

士「それは…オーメダル。それもセルメダルと言うものに分類されるものだ」

ヒナ「彼…高野 エイジはちょうど一ヶ月前の今日、村上美術館のアルバイトに行ったきり帰ってこないんです!!」

士「そこの館長に色々聞いてみるだけだ」

全てを破壊し、総てを繋げ…

5、ボウルと窃盗と美術館

「ここか、ヒナ」

「はい、ここが村上美術館です」

そう言って案内された場所にあったのは二階建ての赤レンガ造りの洋館というか倉庫というか…と言う外見の美術館があった。…ただ尋常じゃないほど大きいく延べ床面積はサッカーコート二つ分と言う。庭など入れたらどれほどのものなのだろうか…あまりの大きさにユウスケなどは「でけえ…」と呆氣にとられ、夏海は言葉すら出なかった…1人だけフリーダムにしている者がいるが…

「とにかく、入ってみるか…」

「そ、そうですね」

「こんなにたくさん何を展示してるんだろう…？」

「ここは美術館と言う名前ですけど郷土資料館も兼ねているのでこの街…夢想町の歴史なんかも展示してるんですよ」

ユウスケの素朴な疑問に微笑みながら言うヒナ。微笑んではいるがその表情は表面的な…ムリに作ったようなモノだ。それが分かるが故に心にグサリとくるものがある…ユウスケと夏海は少し俯いて土は気にしていないフリをしながら扉を開けていた。

――

フロントで事情を説明すると館長が直々に相手をしてくれる事になり土達は来客室に通された。全体的に年代物のアンティークがポツポツと置かれた部屋。一見するとしょうもない部屋だがそのアンティーク達がそれぞれに誇らし気に置かれてありとても雰囲気の良い来客室だった。土達はドア側のソファに座り館長を待つ事になった。

数分後、館長が来客室にやって来た。：何故かボウルと泡立て器を持って：

「ゴメンね、遅くなって：」

「何持ってるんですか！？」

夏海とユウスケは目を丸くして館長：というかボウルと泡立て器を見る。ユウスケはたまらずツッコミを入れる。それに対して館長は柔らかな笑みのまま当たり前のように言う。

「これ？生クリーム」

「いや、そうじゃなくてですね！」

「ユウスケ、まずは目的をちゃんとやってからにしろ、そんなこと」
士がユウスケを諫める。目的を果たそうという使命感を持っているのか：はたまた興味が無いだけか士もさも当たり前のような顔でいた。ヒナはそんな様子を見てただ苦笑いするのみだった。

「あ、私としたことが名前を言うのを忘れていたね。私は村上コウセイ、この館長だよ」

そう村上が名乗る。それに答える形で士達が各々名乗り返す。カンタンに済んだ後、村上が生クリームを混ぜながら本題に入った。

「さて、ヒナくんが来ていると言うことは：例の高野君の事かい？」

「ハイ：そうです：」

「なんだ、一回話した事あるのか」

士がヒナに尋ねる。シャッシャッシャッと生クリームを混ぜる音に紛れる様にヒナは小さい声で「一回だけ：いなくなった三日後に：」と答えた。

「で、高野エイジが行方不明になった事について心当たりはないのか？」

「んー、コレはヒナちゃんと話をした翌日に分かった事なんだけど：」

「館長」

不意に士達の背後から声がかかる。驚いて後ろを振り返るとそこには1人の女性が立っていた。

「その話をされても宜しいのでしょうか？」

「真中くん：私としても彼らには協力したい：もしかしたら：いやあって欲しく無いが、もしかしたら私たちのせいでもあるのだから：」

村上は微笑みを残したまま少し困った様な顔をして言った。するとその女性は「分かりました」とだけ答えすました顔で立っていた。

「誰だ？」

士がなんとなく尋ねる。

「秘書の真中くんだよ。それは今は関係無い。とりあえずその分かった事を言いたいからちよつとついて来てくれるかな？」

そういうと村上は立ち上がる：勿論泡立て器で生クリームを混ぜながら。それについていく為士達も立ち上がる。そうすると真中が前に出て来て彼女と相変わらず生クリーム混ぜに精を出してる村上を先頭に一同は美術館内を歩く事になった。

――

ヒナはこの美術館は郷土資料館の役割もしていると言った。なるほど、中は正面入り口を中心として右が美術館、左が郷土資料館と言う構造になっていた。

現在士達はその郷土資料館側の保管室：つまり一般公開されていない美術品などを保管する部屋に案内された。

「：なんだ、これ？」

「コレは：刀？」

「それは平安初期頃に落ちて来た隕石の欠片。そっちは戦国末期の小太刀。いずれもココらで発掘されたものだよ」

村上は笑いながら：勿論泡立てながら次々に説明をしていく。ただの粘土の様なものから何かの石版まで数々のお宝が保管されている。それらを見ていた士は海東が何処にいるのか気になった。が、どうせひよこり出てくるだろうと結論づけ村上の後について行った。

「ココだよ。彼が失踪したその時からココにあったモノが無くなってるんだ」

そういいながら一番奥にある台座を指差した。その台座には丸が三つ並んでいる絵が書いてある。赤、黄、緑…そう、コレはオーズの印…とすれば置いてあったモノは…

「…なるほど、オーズドライバーか…」

「え…？何故君はそれを…」

士が答え、それに驚く村上。士は「ちょっと少し」と濁した。村上は驚きつつもととりあえず飲み込み話を続ける。そこにヒナが尤もな質問を投げかけた。

「そう、オーズドライバー。それが無くなってしまったのだよ」

「そのオーズドライバーとはなんなのですか？」

「簡単にいうと800年前の戦士の道具だよ…真中くん、頼んだ」

「分かりました、館長」

そういうと何処からともなく紙芝居を取り出しセットする真中…それにユウスケなどは「何故紙芝居!？」など叫ぶが勿論真中には届かずムダにリアルな絵（中川○子みたいな?）を見せながら説明していた。

「800年前、人類は新たな生命を誕生させようとなりました…

と言っても遺伝子研究など勿論無い時代、その研究は難航しました。すると西の方からやってきた錬金術師達の手によって様々な生物を物質化したモノ…コアメダルを作り上げました。そして…」

「「「…………ゴクリ…」」」

全員が息を呑む…真中は少し息を吸い込みこう言った…

「中略」

ドターンと某喜劇並みのコケを見せる士達。それを見た真中は爆笑…村上はそっと呟いた…

「真中くん…ちょっとサドだよね…」

5、ボウルと窃盗と美術館（後書き）

仮面ライダー大図鑑No. 1

仮面ライダー（1号）

「仮面ライダー本郷猛は改造人間である」

全人類の改造人間化及び世界制服を企む秘密結社ショッカーで制作された最強の改造人間。スポーツ万能、IQ600以上の頭脳を持ち合わせる本郷猛が変身する。多彩な技を持ち、仮面ライダー二号に対して「技の一号」と言われる。

パンチ力：不明

キック力：不明

ジャンプ力：25m

走力：100mを1.5秒

仮面ライダー大図鑑No. 25

仮面ライダーディケイド

「通りすがりの仮面ライダーだ！」

平成ライダー十周年記念として生まれた最強の仮面ライダー。なおdecadeとは十周年と言う意味である。クウガからキバまでの平成主役ライダー達にカメンライドでき、相手に合わせて使い分けて多彩な攻撃をすることができる。

パンチ力：4t

キック力：8t

ジャンプ力：25m

走力：100mを6秒

左翔太郎のハードボイルドリイマジ紹介部屋（ヒナ編）

翔太郎「ハードボイルドリイマジ紹介部屋：今回から始まったこの企画、もやし以下省略は出てこないだろうが楽しんでくれ」

フィリップ「あ、最初に断っておくけど、決してこれは僕たちが仮面ライダー×仮面ライダーに何がなんでも出たいから作った企画という事じゃ無いよ」

翔太郎「一人目はやはり小坂ヒナだな…」

ヒナ「え！？そこはエイジくんじゃ無いんですか!？」

フィリップ「彼は現在失踪中と言う面倒なフラグが立っているからね：当分先になると思うよ」

翔太郎「さて、ヒナさん：あなたの自己紹介をどうぞ」

ヒナ「はい、えっと、小坂ヒナです。二十歳の現役大学生です。夢想町出身で幼い頃からずっとここにいます：以上ですかね」

フィリップ「ちなみに夢想町とはもやし達がやってきて今ワイワイやってる街の名前だよ」

翔太郎「さて、ヒナさん：あんたは泉比奈のリイマジとして作られたのだが：その：怪力は使えるのか？」

ヒナ「Σ使えないですよ!？」

フィリップ「第一泉比奈のあの怪力設定なんであったのか疑問に思いたいけどね…」

翔太郎「そういえば何を専攻してるんだ？」

ヒナ「デザイナー部門ですね」

翔太郎「そこはオリジナルと同じなのか…」

フィリップ「考えるのが面倒臭かったって作者が言ってたの言っているの？」

翔太郎「Σおまつ、言ったら確認とる必要ねえじゃねえか!!」

ヒナ「…あれ？私置いてけぼり？」

翔太郎「…四話でエイジを彼氏って言ってたがもしかして…」

ヒナ「はい？付き合ってますけど…？」

翔太郎「……………しろ…」↑ワナワナ

ヒナ「へ？」

翔太郎「リア充爆発しろおおおおお!!」↑Shout

out!

ヒナ「すみませーん！誰か翔太郎さんに癒しをー!!」

※翔太郎はベットに寝込みました。

フィリップ「…翔太郎がいなくなったら翔太郎のハー“フ”ボイルドリイマジ紹介にならないじゃないか」

ヒナ「意図して言ってますよね、フィリップさん」

フィリップ「あとは次回予告だけだけか…」

ヒナ「えーっと次回は…ジンくんね!!」

フィリップ「そう、案外オーズの世界編のキーマンになりそうな日置ジンの紹介をするよ、お楽しみに」↑フロッグのスイッチオン
フロッグ「『さあ、リイマジの数を数えろ！（↑翔太郎ヴォイス）』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0439ba/>

仮面ライダー×仮面ライダー DECAEDvsBESTvsAll Riders ～イノチノメグル

2012年1月14日16時52分発行